の鉱物薬が十六種、淳酒（まじりけのない酒）・牡麴（タネコウジ）などその他の薬物が十一種、である。そして、これらの薬物の炮製・剤型および用薬方法についても、詳しい説明がある。例えば、剤型については、湯・丸・膏・散・醴（薬酒）・滴（滴下薬）・栓（坐薬）を挙げている。

用薬方法では、薬効を高めるため、内服薬には酒・米汁・酢・味噌汁などを副薬として用いること、外用薬では、敷目（点眼）・塞耳（耳につめる）・指摩（指ですり込む）・塗之（塗布する）・滲鼻（鼻に注ぐ）・薄之（塗抹する）などの方法を紹介している。このほかにも、魚肉・葷菜（葱・にんにくなど臭いの強い野菜）・酒・辛（韮・藿など辛い野菜）を食べた時は、薬の服用を控えるべき、といった注意事項が付されている。こうした記述は、後漢時代の中医薬学の発展段階をよく反映しているということができよう。

第二節　中国医学基礎理論の確立

一、『黄帝内経』

『黄帝内経』は中国医学の理論体系を総合的かつ系統的に構築した書物であり、中国古典医学の巨著というに相応しい内容を誇っている。しかも、現存する本格的中国医学書としては最古のものである。

『内経』は、『素問』と『霊枢』の二つの部分からなり、全十八巻、計百六十二篇で構成されている。

『内経』の完成は、上古より、紆余曲折を経ながら伝承されてきた中国医学が、その基礎理論を確立したことを意味する。同書は中国医学が新しい発展段階へと歩を進めたことの記念碑としての象徴的な意義をもつのである（写真・黄帝内経）。

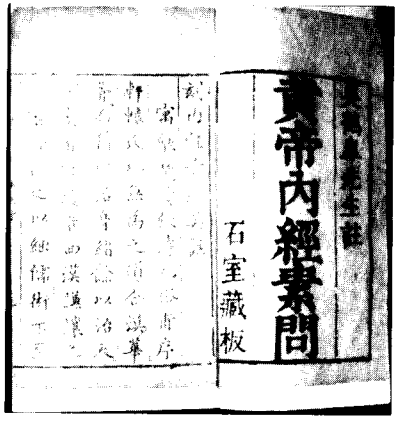
（一）『内経』の書名・沿革と完成年代

①『内経』の書名と沿革

『黄帝内経』の書名を最も早く記載した書物は、前漢の劉歆が著わした『七略』である。しかし惜しいことにこの『七略』なる書は、散逸して今に伝わっていない。現在に流伝している文献の中で、最も早く『内経』についての記載がみられるのは、後漢時代、班固の著わした『漢書』芸文志である。ただし、その中には「『黄帝内経』十八巻」との記述はあるものの、その完成年代はもちろん、『内経』が『素問』と『霊枢』の二つの部分からなっていることにさえ触れられていない。

さて、この書物に冠してある「黄帝」の意味するところについて考察してみたい。大多数の学者は、「黄帝」の二文字は「黄帝在位の時代」を指すものではなく、また黄帝の時代になされた説法や問答を編んでこの書がなったということを指すものでもない、と考えている。では、「黄帝」の名を冠してある理由はなにか。

中国古代の人々は、常に黄帝氏族を中華民族の祖として、尊崇の的とし、また誇りと考えていた。そのため書名に「黄帝」を戴いて民族の始祖に対する敬意を表わすと同時に、この『内経』が古く開祖の時代にまでその淵源をさかのぼるものであるとの含みをもたせたものと考えられる。もうひとつには、『内経』が編纂された時代には、道教の影響がことのほか強く、道家はまた黄帝をその師祖として推戴しているところから、「黄帝」の名が書名に冠せら



黄帝内経　現存する最古の中国医学理論の著作で戦国から秦・漢代にかけて成立したと考えられる。『素問』と『霊枢』の二部に分れ，系統的，包括的に中国医学の基礎理論が展開されている。合せて18巻，162篇に及ぶ。

れたと考えることもできる。

では「内経」の意味するものは何か。

「内経」という書名に対しても、古来さまざまな解釈・説明がなされて来た。一般的な説では、「内」は「内外」の「内」であり「外」と対称関係にある「内」を表わし、また「経」はすなわち「常道」の意味であると解釈されている。『漢書』芸文志に挙げられている七つの医書は、『黄帝内経』『黄帝外経』『扁鵲内経』『扁鵲外経』『白氏内経』『白氏外経』などで、これらの書名からも「内経」と「外経」にとくに深い意味があるわけでないことが了解できよう。

前述したように現在に流伝し来たった『黄帝内経』は、『素問』と『霊枢』の二つの書で構成されている。このうち、『素問』という書名が最も早く現われるのは、後漢末年に張仲景が『傷寒雑病論』の自序の中で、「『素問』、『九巻』を撰用し……『傷寒雑病論』併せて十六巻と為す」と述べた一文においてである。その後、晋代の皇甫謐が『黄帝三部鍼灸甲乙経』の中で、『内経』が『素問』と『鍼経』の二つの書からなると記した。

しかし、これらの記述に先立つ戦国から秦・漢時代にかけては戦乱・兵火が絶えなかった時期であり、『素問』が唐代に流伝して来た時には、同書はすでに部分的に脱落してしまっており、完全な姿を留めていなかった。唐の太僕令の任にあたっていた王冰が『素問』の注解書を編纂した時には、唐代までに、すでに第七巻が欠落していることが確認されている。

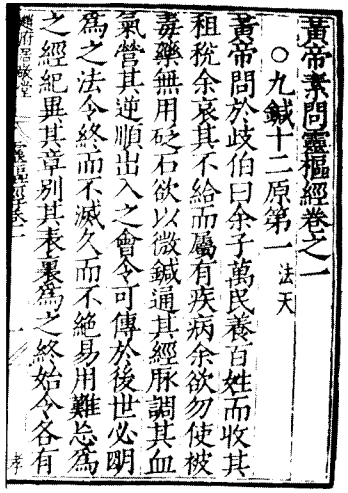
そこで王冰は十二年の歳月をかけて『素問』の再編・収集・整備を進め、欠落していた「天元紀大論」など七篇を補足するとともに、『素問』全体の注解書を編み、『補注黄帝内経素問』二十四巻、計八十一篇を著わした。しかし、この労作をもってしても、「刺法論」と「本病論」の二つは篇名のみあって、内容文は欠落したままであった。ようやく、宋代に入って、劉温舒はこの二篇の中味を補充し、これを「素問遺篇」とした。

さらに、嘉祐二年（一〇五九年）、北宋の医官であった高保衡、林億らは、王冰の『補注黄帝内経素問』に校正を加えたのち、『重広補注黄帝内経素問』として刊行した。これが今日まで流伝している『素問』である。

もう一方の『霊枢』の名が最初に見えるのは、王冰の『補注素問』および、班固が『漢書』芸文志の中に記した次の一文である。「『黄帝内経』十八巻、『素問』即ち其の経これ九巻なり、兼ねて『霊枢』九巻、乃ち其の数なり」。

先にも述べた通り、これ以前に張仲景が『傷寒雑病論』自序の中で言及している『九巻』という名称の書物は、すなわち『霊枢』のことである。その後、晋代の皇甫謐による『鍼灸甲乙経』では、『九巻』は改称されて『鍼経』となり、さらに隋・唐時代には、『九霊』や『九墟』などの名称でも呼ばれていた。

『霊枢』はかつて、相当長期間にわたり散逸したままの状態にあったが、北宋の元祐八年（一〇九三年）に高麗（高句麗）より中国へ伝来し直した『鍼経』の一部に、早速、補塡の筆が加えられ、かなり整備された『鍼経』が保有されることになった。また南宋の紹興二十五年（一一五五年）には、史崧が、「家蔵の旧本『霊枢』九巻、共に八十一篇を校正し、増し修め釈を著わし、巻末に附し、勒（調整）して二十四巻と為す、庶くは好生の人（生を好む人）をして、巻を開き明を易め、了に差別（原本との区別）無からしめんことを」と序した書物を、刊印（木刻版として書に印す）出版した。世に『霊枢経』として流伝したものがこれである。明代に至って、馬蒔は『霊枢』に再度、注釈を加え、『黄帝内経霊枢注証発微』を著述し、巻数も元に戻して九巻とした。そして、現代に流布している版本は、明代の趙府居敬堂によって刻本・校閲ののち刊印された全十二巻、計八十一篇のものである。


黄帝素問靈樞經卷之一
○九鍼十二原第一　法天
黄帝問於岐伯曰余子萬民養百姓而收其
租稅余哀其不給而屬有疾病余欲勿使被
毒藥無用砭石欲以微鍼通其經脉調其血
氣營其逆順出入之會令可傳於後世必明
爲之法令終而不滅久而不絶易用難忘爲
之經紀異其章別其表裏爲之終始令各有

霊枢九鍼十二原　『黄帝内経・霊枢』はまた『鍼経』とも称され，現存する最も古い鍼灸などの専門書である。